

いつもの生活へ 円滑な復帰を支援



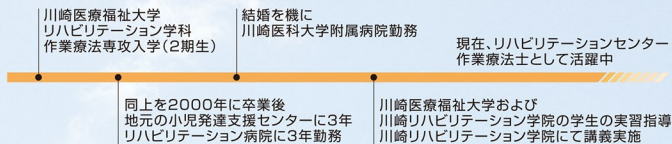
医療最前線 >>> vol.47
川崎医科大学附属病院
作業療法士
リハビリテーションセンター
療法士長
大塚啓司 安井美佳
Hiroshi Ootsuka (左) Mika Yasui (右)

Occupational therapist

作業療法士とは

作業療法士 (Occupational Therapist / OT) とは、身体障害、精神障害、小児の発達障害、高齢に伴う障害など、さまざまな障がいに対する復帰の支援を行なうリハビリテーションの専門職 (国家資格)。食事や入浴など日常生活の動作や手工芸、園芸及びレクリエーションなど、さまざまな作業活動を通して、身体と心のリハビリテーションを行なう。病院や介護施設などのさまざまなリハビリテーションの現場で、作業療法士が活躍している。

作業療法士になるために ~安井さんが歩んだ道~



自立生活や職場復帰をサポートするスペシャリスト

作業療法士に
求められる
素質とスキル

- ✓ 患者さんやご家族および他職種とのコミュニケーション能力
- ✓ いろいろなことに興味・関心を持ち、患者さんの立場になって考えられる柔軟さ
- ✓ 病態を的確にとらえ、その上で患者さんの生活がイメージできる知識・技術・創造力

患者さんとともに喜びをわかちあうことのできる専門職
突然の事故や脳卒中の後遺症で、今までできていた生活ができなくなった患者さんのために、さまざまな専門職がかかり、元の生活に近づけるようサポートをしています。そのなかで、食事やお風呂に入るなど、日常生活動作を、安全かつ確実にできるように訓練を行なっているのが作業療法士です。楽しく、飽きさせないように創意工夫し、身体と心のリハビリテーションを行ないつつながら、患者さんの能力を伸ばすことを支援し、できたことを一緒に喜ぶことのできる職種だと思います。

川崎医科大学附属病院 回復期リハビリテーション病棟
副師長 渡辺恵子

笑顔がまぶしい作業療法士たち。「障がいのある患者さんのために役立つ医療を行なう」をモットーに多くの患者さんのQOL (生活の質) 向上を目指して日々の業務に取り組んでいる。

リハビリテーションは日常生活のさまざまな動作や行動を意識した特殊な機器や器具を使って行なわれている。作業療法士は患者に日々、寄り添いながら笑顔でトレーニングに取り組んでいる。



障がいを持つ人の自動車運転復帰支援のひとつとして導入したドライブシミュレーター。ハンドルやブレーキの操作データから、人や車などの障害物を避けることができるかを作業療法士が評価している。



さまざまな患者さんを受け入れている当院。住み慣れた地域や自宅での生活、仕事への復帰など、「いつもの生活。いつもの自分」を取り戻すために日々がんばる患者さんのそばに、作業療法士の献身的な姿がある。

お問合せ

川崎医科大学附属病院 (倉敷市松島5-7)
0864621111
<http://www.kawasaki-m.ac.jp/hospital/>

体を起こすのもしんどいです。でも動かないと機能が衰えてもつと動けなくなってしまう。特に、排泄は介助なく自分の力でトイレに行きたい」とどの患者さんも強く思われます。まずベッドから起きる練習。座れたら今度は立つ。立てたらトイレに移る練習。そうした毎日の積み重ねが実つて、できなかつたことができた時の笑顔。患者さんやご家族と一緒に喜んでくれる。それが作業療法士としてのやりがいだと私は思います」。

急性期、小児から高齢者の患者さんまで
大学病院として幅広く対応。

「大学病院という特性上、脳卒中や事故による熱傷や切傷、多発外傷といった急性期の患者さんが多いのが当院の特徴です。それゆえに当科の作業療法士は、手術前から手術後まで一貫して、患者さんやご家族にしっかりと寄り添って職務にあたっています」と大塚さん。チーム医療について尋ねると、「医師、看護師、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士、そしてリハビリテーションに携わる理学療法士言語聴覚士作業療法士、誰が欠けてもチーム医療は成り立ちません。リハビリテーションセンターに勤務する作業療法士は多職種と連携しながら、患者さんと日々向き合っています」。

当院の四〇人を超える作業療法士を束ねる療法士長の大塚啓司さんに、理学療法士との違いについて尋ねると、「理学療法士は、手足の曲げ伸ばし、寝返り、立ち上がる、歩行といった基本的な運動機能の回復を運動療法や物理療法を駆使して訓練します。作業療法士は、『いつもの生活』へ復帰するための支援のほかに、小児の発達支援や精神に障がいのある患者さんへのリハビリテーションも行なっています」。

作業療法士としていつも留意していることは？との問いに安井さんは…

「患者さんが何を必要としているか、今後何が必要なのかを予測することが大切です。そのために、日々の何げない会話から患者さんの真意を読み取り、モチベーションを保ちながらリハビリテーションを続けていけるような心理面、認知面を含めてサポートするのも作業療法士の重要な職務です」。

一六年のキャリアで安井さんがやりがいを感じた瞬間は？との問いに…

「がんの場合、患者さんによってはベッドから

患者さんに何が必要かを予測する力。
毎日の積み重ねが実る喜び。

優しい笑顔が印象的な作業療法士の大塚

美佳さん。実務内容をこう説明してくれた。

「作業療法士は医師の指示を受け、患者さんが『いつもの生活』に戻れるようリハビリテーションを行なっています。食事、着替え、入浴、トイレといった生活を、食器、着替え、入浴の動作、筆記をする、キーボードを打つといった、その方の仕事や学業復帰に必要な動作。また、庭の花の手入れをしたい、手料理を家族に食べてもらいたい、といった生活を豊かにすること。そういった生活行為ができるように機能回復の訓練を担当します」。